

Y O K A C A R E O M U T A

ヨカケア
お お む た

We are now in the 21st century and heading towards a super-aging society.
However, it is difficult to say that an excellent nursing care system has been established.
There are many problems such as wages and work-life balance because various nursing care workers are involved.
Nonetheless, nursing care workers find joy and pleasure in their work because they take care of people.
The work that supports people gives us precious awareness, learning, and the power to move on to the future.
We interview a wide variety of nursing care workers
who are active in their field and approach their thoughts and reality there.

12の生きる介護

THE FUTURE OF CARE IS THE FUTURE OF US.



グループホーム	大淵 一彦 の場合	3
介護老人保健施設	赤木 海斗 の場合	4
通所リハビリテーション	小森 ルミ子 の場合	5
福祉用具貸与	齋田 豪起 の場合	6
短期入所生活介護	松本 裕美 の場合	7
通所リハビリテーション	西田 美智子 の場合	8
特別養護老人ホーム	篠倉 誠 の場合	9
訪問看護	松永 美紀 の場合	10
訪問介護	伊藤 耐子 の場合	11
小規模多機能型施設	松尾 由美子 の場合	12
居宅介護支援	藺田 晋輔 の場合	13
通所介護	酒本 恵利加 の場合	14

12の生きる介護

CONTENTS



21世紀の今、私たちは超高齢化社会へと歩みを進める。しかし介護の現場は、十分整っているとは言い難い。さまざまな人が対象であるがゆえの問題、賃金、ワークライフバランス…。課題は山ほどある。

それでも、介護の現場には人が相手であるからこそ喜びや魅力がある。人そのものを支える仕事は、私たちにかけがえのない気づきや学び、未来へ進む力を与えてくれる。ここでは、介護の現場で活躍する多様な人々取材し、そこにある彼らの思い、そしてその実際に迫る。

夜勤明けの朝にも関わらず、はつらつとした表情で現れた大漕さんは今年70歳。現在のグループホームで8年、介護士として働いている。介護士になったのは55歳のとき。長年勤めていたパン製造の会社を早期退職した直後に実父が病気で倒れ、そのため近くの介護教室に通ってヘルパー2級を取得した。それ以来、第二の人生として介護の道を歩むことになる。「もう全くわからん状況だったんだけど、ちゃんと教室

に行ったら、あ、なんとかできるかなって感じで。そしたら教室で一緒やった人が先に就職されて『ここは良かばい、来んね』と誘ってくれて。私はもう働くつもりがなかったんですが(笑)』。

それ以降、グループホームにこだわって仕事を続けている。起床から就寝、夜間と暮らしに密接に関わるほか、対応する利用者の数が限られているのが大漕さんの性に合っているようだ。「忙しいってうか、

なんか楽しさが先ですね。もうここはね、まず仲間が良いですよ。それにびっくりしました」。これまでも横のつながりはあったが、現在の職場はすごく特別らしい。「まず職員さんたちに思いやりがあるとですよ。利用者さんに対してもスタッフに対して、もうみんなに対して。それにはびっくりしてですね、助け合いというか。自分がちょっと時間をロスしたとしてもすぐにカバーしてくれたり。あとトップが最高なんです。利用者

大漕

グループホーム

一彦 (70歳)

株式会社あすか介護サービス
グループホーム三丁目のわが家所属
介護士
大牟田市出身。大学卒業後、パン製造業の営業職を勤めた後に55歳で早期退職を選択。その直後に実父の病気がきっかけで第二の人生を歩むことに。2015年から現在の職場へ。

できる限りの役割を

果たし続けたい

MY LIFE

さんが第一なんです。それと同時にスタッフにもすごく気配りしてくれる。健康面とか休みについてとか色々と気遣ってくれる」。

そんな大漕さんの趣味はドライブだ。営業時代に散々車の運転をしてきたこともあって苦にならないそう。それで近くの温泉や道の駅へ奥さんと行くのが楽しみの一つとなっている。時には遠方に住むお子さんからのリクエストに応え、旅先の直売所で特産品を探して送ることも。

これからの目標を尋ねると、「他の職員と話したんですよ。あなたが75歳までいくなら、俺も75歳までいって。何かですね、いけそうな感じで(笑)」。「スキルアップしたいというよりも、そこは周りにはちょっと教えてくれたりする同僚もいて。とにかく利用者さんを怪我させないように、倒れさせないように。今は第二の人生だと思っていて、働かせていただける場所があれば、働こうと思って。上を目指そうとか、考えてないんです。いつも通りなんです」。

大漕さんの話は私たちに新しい介護のあり方をも示してくれた気がした。後日、改めてご連絡があり「給料日には皆に仕事へのねぎらいの言葉を書いたカードが贈られるんですよ」と。75歳で大漕さんの道が終わるとは思えない。

自分だからできる

自分がやる

リハビリテーション



介護老人保健施設

赤木海斗

(28歳)

赤木さんは理学療法士、利用者のリハビリが日々の仕事だ。仕事を終えて家に帰り、子どもを寝かしつけた後に奥さんと飲みながら話す時間が一日の疲れを癒す。「妻も介護福祉士で、もう介護が大好き。話をしているうちにお互いの姿勢の話とかでヒートアップしたりします。結構熱い人なんです。今日も(取材に)私が行って話したいって(笑)」。

赤木さんは長崎県平戸市生まれ。大学進学のために熊本に移住後、現在就職先の大牟田市に住んでいる。「両親は長崎に帰ってきて欲しかったみたいです。でも、子どももこの町が好きだし、いい仲間、いい職場に出会えたので、僕も大牟田を離れるつもりはありませんでした」。

赤木さんが理学療法士の道を志したのは小学生の頃。ある日、親しんでいた佐世保に住む母方の祖母が脳梗塞で倒れ、それから毎週のように見舞いに行った。「会話とかはできなかつたんですが、リハビリを通して全然動かなかつた身体が少しずつ

回復していくのを目の当たりにして。反応が分かるようになっていったんです。頷いたりできるようになって、なんだか心まで治っていくような。ああ、理学療法士ってカッコいいな、と。イチコロでした」。

そこから一心不乱、理学療法士への道が始まる。高校を卒業後、一切迷うことなく資格をとることができる大学へ進学、国家試験を受けた。落ちた。「初めての挫折でした。それまで夢に向かってとんとん拍子にステップを踏んでいけたんですが、ここに来て」。まわりにいた仲間の中にも、ここまで、という人もいた。現役生に比べて、再チャレンジした場合の合格率は低い。

しかし折れなかった。二卵性双生児の赤木さんには双子の妹がいる。同時に二人は大学にやれない、そんな事情の中、同じく進学を望んでいた妹が「もう兄にいかせてあげる。その分頑張ってきてね」と。頑なな自身の夢、妹さんの願いの甲斐もあり、無事、国家資格を取得した。

職場では、リハビリだけでなく、介護の仕

事もよく手伝う。「起床の介助、車椅子に移してトイレに連れて行ったり、食事や排泄の介助だったり。そうするといろんなことが見えてくるようになりました。それまで全然知らないことばかりで」。今では介護の目線でリハビリを行ったり、リハビリの技術をスタッフやご家族に伝えたりもする。

「人の気持ちがわかる人間になりたい」と赤木さんは言う。利用者のこと、同僚のこと、皆の気持ちや状況をもっとよく知って、自分なりのケアに活かしていく。「昔の話とか聞くんですよ、利用者さんから。過去にこういうことがあった、入院先で転倒したとか。それで身体を動かすことに対して恐怖心があったり。そんな気持ち汲み取って、じゃあこうすれば不安なくできるのかな、そういうリハビリの仕方だったりとか教えて」。

ひたすら真っ直ぐな赤木さん、これからどんなケアを形にしていけるのだろうか。

社会福祉法人甘木山学園
介護老人保健施設サンファミリー所属
理学療法士
長崎県平戸市出身。熊本の大学へ進学後、総合病院勤務を経て、2021年現在の職場に就職。

小森さんのご実家はラーメン屋さんだ。苦勞する両親を見て育ち、「安定した仕事で、とにかく手に職をつけたかった」。いところが看護師で身近な医療職に興味をもった。熱中していたバレーボールが認められたこともあり、看護科のある地元高校へ進学。そこで「リハビリテーション」の分野を知る。「看護実習を受けていた時に、リハビリでは、一歩踏み込んだことができるのでは」と、理学療法士の道を歩むことを決めた。

それから27年。長い間、病院でリハビリを専門に勤めてきた。2022年、通所リハビリテーションの管理者という形で介護に関わることになる。「これまで一対一の治療という形で関わってきたんですが、今は様々な職種の職員やご家族などに対してマネージメントする立場になりました。ただ業務の中にも入っていかないと分から

ない部分があるので、そちらにも入ったりします」。ケアに関わるなかで気付いたことがあった。「介護現場の大変さとかスタッフのケアスキルの高さとか、何よりケアする中で利用者さんの体がもうちょっとこうなればいいのにとか、実際の場面を想定しながらリハスタッフにフィードバックするのも私の役割かなと思います」。

小森さんの心には、かつてリハ職として味わった葛藤が今も燦る。「医療では、当

たり前ですが治療が優先なんです。身体拘束もオムツも本人が嫌がっていても治療に必要ならばするんです。リハ職としては、多少強引でも治療の為に運動を行います。ただ、実際には改善が難しい方もいて、段々と生活のイメージが持てなくなって、実際の家での話を伺ったり、必要なことっていうのを目の当たりにして、もう必要なことを提供してっていう充実感と

未来を築く

地に足をつけて

通所リハビリテーション

小森 ルミ子 (49歳)

社会医療法人親仁会 介護老人保健施設くろさき苑所属
理学療法士

柳川市出身。市内の高校を卒業した後、熊本の専門学校で理学療法士の資格を取得。1996年に社会医療法人親仁会へ就職。みさき病院・米の山病院勤務を経て2022年に現在の職場へ異動となり、通所リハビリテーション課科長として勤務している。

どうか、求められていることを提供できるっていう喜びというか。そこには大変さはあるんですが、リハの時は本当に気付いていないことがたくさんあったなって」。その一方で「リハの時に見ていた細かい動きみたいなのが、見えなくなってきてるなっていう、ちょっと残念さもなくはないんですが」。リハビリのベテランは今も現在進行形で気付きと学び、そして新たな疑問を得続ける。

管理者としての悩みもある。「私たちの組織って、困っている人たちを見捨てないっていう考えの歴史があるんです。弱い人たちに寄り添うような。そこに経営がついて行くといいんですが、一人突っ走っても息切れしてしまう。今も試行錯誤です」。そこで、職員のモチベーションを保ちながら利用者へのケアの質を高められるような仕組みを考えている。「例えばフォトコンテストとか。利用者さんの写真を撮って贈ったり、展示してご家族に見ていただいたり。良い表情を撮りたいと思うと良い取り組みをしないといけないし、職員も楽しんでやれるんじゃないかと」。「あとスタッフを担当制にしてみたらどうかと。やりがいと責任感を持って、利用者さんに一所懸命になれるんじゃないかとかです」。日々の管理業務に加えて現場へ、また

未来の介護福祉への展望一。ラーメン屋さんの娘は、足元と同時に地域の将来を遠く見据えている。

齋田 豪起

福祉用具貸与

(29歳)

人の人生を
少し豊かにする
二人三脚

齋田さんは手摺りや車椅子などを扱う福祉用具の専門家だ。生活や介助に必要な道具を案内したり、手配したりする。「本当に人のために思ってやる仕事だと思ってます。ものすごく楽しいですね。利用者さんの笑顔とか癖になるというか。ご家族から『助かってます』と言われると、努力した甲斐もあってすごく嬉しいです」。

前職は広告代理店の営業マンだった。「ノルマはあるし、年間でいくら稼いでこいみたいな」。そんな中、転職の話が出た。「東京に10年くらい行ってこれみたいな。福岡にいたいですって伝えたら、だったら広島に行けて(笑)」。そんな話を帰省の折に家族に話した。兄が言った。「ちょうど人手不足なんだ。うちで働かんか？」家に帰るたびに夜中まで仕事をしている兄を見ていた。「これもなんかタイミングかなと」。

当初は顔を覚えてもらうところからのスタートだった。仕事を教えてもらいながら、福祉用具専門相談員の資格を取った。

「僕らの中に、最短でいこうっていう考

え方があるんですよ。今すぐ欲しいって言われても最短で2時間はかかる。在庫がない場合はもっとかかりますし、レスポンスをもっと早くできるといいなとは思っています」。また、「最近あった例なんですけど、布団から起き上がるのに手摺りが必要だって仰るんですが、今出てるものだとサイズが合わない。横を向く動作も難しいんです。だから『ちょっと1日待ってもらえませんか』とお願いして、社長と二人で探して。廃盤になってたんですが、取引のないメーカーとかも当たってようやく見つけました。それがすごく気持ちよかったです。またそれが知識になったりもするんです」。

小学生の頃に和太鼓を始めた齋田さん。高校時代は吹奏楽を、マーチングで有名な大学へは推薦で進学した。「やっといううちに指導者になりたいなと思ってきて」。現在も土日は母校でコーチを務める。「喋り方とか伝え方とか、分かりやすく、ゆっくり喋るんです。伝わらないと意味がないので。仕事をする時に指導の喋り方

を思い返したり、指導してる時に仕事の時の喋り方を思い返したり。なんか良い方向に繋がってるのかなとは思っています」。

現在の夢を尋ねると、「企業を大きくしたいっていうのはあります。誘われた時に自宅兼事務所みたいな感じだったんですが、それを見た時に、戸建てとかテナントとかにしたいなと。二人でそういうのを先頭に立って突き進んで、大きくできたら面白いなと思ったんです。大牟田といえば、齋田兄弟みたいな」。

「前の会社を辞める時、当時の部長から『絶対上手くいかない。喧嘩になってどうせどっちかが辞める』って言われたんですよ。現実的なことを仰っていたと思うんですけど、そうはなりたくない。逆にその成功例を見せたい、見返したいっていうのもあります」。「喧嘩はよくするんですけど、基本的には仲がいいのかなとは思っています。この業界においては尊敬してるくらい。考えがものすごく大人なので、尊敬しますね。言わないですけどね」。

株式会社Saita所属
福祉用具専門員
大牟田市出身。高校卒業後、岡山県の大学へ進学。
広告代理店勤務を経て、2020年株式会社Saitaに入社。

DREAMS

自分らしく

私たちのケアのかたち

SWEET
MY HOME

短期入所生活介護

松本 裕美
(57歳)

社会福祉法人大牟田市福祉事業協会
特別養護老人ホーム 昌普久苑所属
介護福祉士
荒尾市出身。専門学校を卒業後、歯科衛生士に。結婚・出産を経て2007年から現在の職場へ。

せてもらってるかなって思っています。介護っていうと、入浴、排泄、食事介助とかそんなイメージがあると思うんですが、1日を皆さんがこういうところで暮らすわけじゃないですか、特養とか。その中でも、やっぱりこう自分なりに生活して、楽しく予後を過ごしていただければという支援をしていければなと思いながら日々仕事をしています」。

松本さんへの周囲の信頼は厚い。様々な(時には難しい)依頼に対して、分け隔てなく誠意をもった対応してくれるからだ。それも的確な対応を。

松本さんが勤める職場はショートステイに対応している。「しばらく家を留守にしないといけないが母を一人で置いておけない」「週末デイサービスがお休みだから」「在宅介護に疲れているが、ずっと預けることはできないので週末だけでも」といった事情で短期間の滞在ができるサービスだ。

「本当は看護師になりたかったんですが、高校卒業後に行った学校で歯科衛生士の資格を取って市内の病院に勤めました」。その後、結婚、出産を経て2007年に介護の世界に入った。「そこまで苦にはなかったですね。コミュニケーションが少し苦手な方とかいらっしゃいますが、そういう面では逆に元気をいただいて。皆さんの笑顔を見て癒されています」。当時、地域には同居家族や高齢者が多く住んでいた。「歯科衛生士として人と関わることも多かったですし、市の育児ボランティアにも参加しました。民生委員になって欲しいと頼まれたこともあります。人付き合いというか、そういうのは嫌いではなかったですね」。

しかし、夜勤や宿直はもちろん、緊急時の呼び出しもある職場だ。「夜勤までなくちゃいけないのなら辞めろって夫に言われたという知り合いがいますが、私も最初はそうでした。でも続けていくうちに、徐々に介護っていう仕事に対する理解が進んできて。夫だけでなく子ども達も変わってきました」。

松本さんはベテランの介護サービス提供者であると同時に、社会的に主介護者の割合が多い世代でもある。「母と近い年齢の方たちが利用されたり、私と変わらない方たちが主介護者申し込みに来られたりとか。そんな感じなので、共通の話題じゃないですけど共感して、こうだよねって感じでお話ができる。ショートステイだったら、こういう使い方もできますよとか。急なんですけど受け入れ大丈夫ですかっていう時も、ちょっと緊急に受け入れが可能になように対応したりとかですね」。当事者としての意識を共感・共有できるのも強みな印象だ。

仕事への熱心さの反面、家に帰るとぐったりすることも。好きなものは「スイーツ」。夫と一緒に楽しむ時間が癒しでもある。

「スキルアップというか、今は介護の世界もどんどん情報収集とか介護の仕方とか変わってきているので、いろんなコンテンツとか見たり、介護のやり方を勉強したり、自分なりのスキルアップをしながら、学んだことを後進に伝えていきたい」。

「最近では、基本的な介護、それにはない介護もあるのかなって。その辺りを経験さ

毎日が本当に楽しいという西田さん。自然と朗らかな人柄がにじみ出る。好きなことは沢山あるが、ワーキングホリデーでカナダから帰国したばかりのお子さんと先日登山を楽しんできたそう。学生時代は卓球に熱中した。コロナ禍以前は御朱印集めに精を出して姉や子ども達と遠くまで出掛けた。「今も朝晩30分くらい走ったりして、足とかちょっと筋力も付いてきたかなと思います。」

「こちらのデイケアは、結構しっかりしてある方が多いんです。話も合うことが多いです。それで勉強にもなるんですよ、料理の仕方とか。子どものしつけ方を尋ねたら、こうしたらいいんじゃないかと

か、教えてもらえて。楽しいですよ。」

高校卒業後、結婚を挟みながら転々と幾つかの職業を経験し、保険のセールスに携わった。「なんかもう自分が嫌になるくらい落ち込んだりして」。その後に出会ったのが通所型のリハビリ施設だった。資格は取得したもの、現場では完全な初心者。先輩の厳しい指導も堪えた。「普段はすぐざっばらんにお話できる方なんですが、仕事に対してはすごく厳しくて。できないと、なんでできないの!とか、こも1回やり直さない!とか言われたり。どこが分からないのかも分かりませんって言って(笑)」。「送迎車の運転も初めから10人乗り。すごく細い道で。怖いって言っ

ちゃダメよ!って言われながら。でもそこで運転が上手くなりました。すごく上手って褒められます。今はそこにいる勉強できて良かったなって本当に思いますね。厳しいところを経験して良かったと」。

今の職場は自宅から車で約20分の距離だ。道路も比較的の広いうえに、よく知った土地でもある。外に出るのが好きな西田さんにとってこの上ない立地だ。所属している病院は子どもが小さい頃に何度も世話になった。そんな西田さんの長男は理学療法士になった。彼女自身もここに来て10年が経つ。

「初めはケアマネジャーになりたいと思って本を買ったんですよ。でも実際に見てたら大変だなんていうのもあって。それより楽しみながら仕事ができたらなって思い直して。もう利用者さんと接してる時が一番楽しい。ちょっと嫌な時もありますけどね。でも、笑いながらお話もできるし。送迎中に一緒に歌いながら行ったりとかもできるし。ケアマネジャーになれたとしてこんなことできるのかなって。それでそちらへの道を辞めました。直接的に利用者さんと触れ合える時間が長かったりとか、そういうのが性に合ってるのかも分かりません。立場としては主任なので、本当は自分が指示しなきゃいけないんですけど。ダメだなんて思います」。

慣れ親しんだ
地元での介護

西田美智子

通所リハビリテーション
(58歳)

医療法人寿心会 木村内科医院
通所リハビリテーション デイケア ひまわり所
介護福祉士
大牟田市出身。高校卒業後、会社員、歯科助手、手芸店、保険のセールスなど
幾つかの職業を経て現在の職場へ、愛犬家。



飼い始めて間もないワンちゃん。
「手がかかる時なので、まだ癒しには
なっていません(笑)。夜、寝る時くらいかな。
と西田さん。

ENJOY

子どもの頃に一緒に暮らしていた祖父との関係が仕事の原点と言う篠倉さん。じいちゃんとはあちゃんがいるのが当たり前、そこが生活の中心だった。「勉強を教えてもらったり、一緒にゲートボールしたり。自転車で二人乗りして出掛けたりもしました」。高校に上がった辺りから祖父の物忘れが増えはじめた。当時は認知症という言葉もなく、ただ「歳をとったから物忘れが出はじめた」という感じだった。「自分が一番の話相手だったんですよ」と篠倉さん。「いつもコタツに入って話してたんですが、たまにじいちゃんのポケットからコタツの中に小銭が落ちるんですよ。それを黙って拾って。それも一緒にコタツに入る目的の一つでした(笑)」。

祖父の認知症が進行する中、高校卒業後の進路を決める時期になった。「その後の就職のことなんて考えられなかったんですが、福祉を学んでおいて家に帰ったとき、じいちゃんのお世話でもできたらいいなと思いながら兵庫の福祉大学を受けて、結局そこで離れ離れになったんですよね」。「それだけが原因じゃないと思うんですけど、がんが見つかって、進行が早くてですね。大学2年の時に亡くなったんです。そこで改めて、大学に行って勉強もしたし、こういう仕事に就いてみたらどうかって踏み込んだのが一つのきっかけです」。

実習からそのまま就職した現在の職場。ここに来て18年が経つ。仕事を続けていく中で、大学で同級だった女性とも結婚した。2022年には生活相談員としての役割も増えた。「今の仕事は、利用者のご家族と話したり、パソコン作業だったり、送迎だったり。裏方というか、誰かがしなきゃい

けない仕事なんですけど、利用者との喋る時間がどんどん減ってしまって。関わりの上でのコミュニケーションが好きなので、寂しいなとは思いますが、でもその分、利用者の思いや願いを実現できるポストなので、責任は伴いますがやりがいなものすごく大きいんです」。

また、篠倉さんは自身の役割の変化とともに、業界をとりまく法整備にも変化があるという。「介護保険の改正で要介護3からしか入所できなくなって、利用者の重度化が顕著になってきているんです。その中で業務中心にならざるを得ない状況があって。でも、そういうのをなんとか

したいと思って、今まさに動いている真っ最中です」。

休止していた家族との面会を再開した。「まだ予約制」とのことだが、5分間だけ面会が許されることに。家族一緒での外出も解禁した。事前連絡と体調チェックは必須だが、新型コロナウイルス5類感染症移行を経てそれでもできるようにした。「お墓参りに行きたいというご家族の希望があって大分まで行かれたんです。その方は最近亡くなってしまったんですが、ご家族と話をしていて、『やっぱりあの時、一緒に行けたけん良かったよ』という言葉をいただいて。ああ、やって良かったなと」。「ファストフード

を食べたいと、ご家族とドライブスルーに行かれた方もすごい笑顔で帰って来られたりもしました」。

“あなたと地域の応援団!!”これは所属している法人の理念だそう。「何年後になるか分かりませんが、コロナ禍以前までのように自由にご家族が中に入って、自由に面会ができるような環境を1日でも早く作りたいとは思っています」。秋に開催するお祭りの準備も進んでいるそう。篠倉さんの声援はどこまでも響き続ける。

特別養護老人ホーム 篠倉 誠

(41歳)

社会福祉法人福因寺福祉会 延寿苑所属
介護福祉士・生活相談員
大牟田市出身。高校卒業後、兵庫にある福祉系大学へ進学。実習先の現在の職場へ介護士として入職した。
子どもたちにソフトボールを教えながら、自身はバイクが好きな二児の父。

RUN
ON
OUR ROAD

思いや願いを叶えたい
まっしぐら応援団

本を読んだり、映画に行ったり、温泉に行ったり。プライベートはそんなことを一人でやるのが気楽で良いという松永さんは看護のベテランだ。看護師として働き始めて31年、訪問看護に携わって15年が経つ。

幼少期は大勢の子どもたちに囲まれて育った。4人兄妹の3番目、近所にもたくさん遊び友だちがいた。暗くなるまで遊んだり、やんちゃだったという松永さんに、あるとき3つ下の妹が生まれた。「赤ちゃんがすごく可愛くて。楽しんでお世話してたんです」。しかし、小学生の頃に父が始めた事業が失敗した。そのとき、やはり女も手に職があった方が良く感じていたのか、母が勧めてきた看護師への道を歩むことになる。

専門学校を卒業して東京で就職。その後、沖縄など様々な地域で看護師として働いてきた。現在の職場で初めて訪問看護を担当するようになった。「これしかできないからです」。そんな松永さんの携帯電話に取材中もスタッフからの電話が入る。

訪問看護に携わるなかで、忘れられないエピソードがある。「90に手が届くくらい高齢のご夫婦で、奥さんの方を見ていたんですが、ご主人が背中が痛いて言いながらいつも整骨院に行かれてたんです。そんなに痛いんですか?と話は聴くんですが、アクションは何もできませんでした。その後痛みが強くなってきたということで娘さんたちが病院に連れて行ったら、結局末期の肺がんでした」。

松永さんには今でも「あのとき何かしてあげられたんじゃないか」「整骨院じゃなくて病院に行ってみたらと伝えられていたら」という思いが強く残る。

「私も子どもがいて、知人がいる。家族の誰かが倒れても大変ですもんね。だから家族含めて観察しないといけないと、そのとき初めてつくづく思っ」。 「だから仕事自体は一人で行くんですけど、他のスタッフと繋がるんですよ。さっきみたいに困った時は電話で繋がれる」。 「誰さんのところ、こうあったよって。私はこうしてるとかっていう話をしたりして。みんなでそういう風に一人で行ってるけど、本当は一人じゃないんですよ」。

病院での看護と異なり、訪問看護では利用者のお宅へ訪問してのサービスとなる。「初めはやっぱり心がざわざわしました」と松永さん。「不安なんです。でも一人でケアしてるわけじゃないよ。みんなで作るんだよって言って」。 「管理者って結構孤独って言われるんですけど、私に孤独感はないです。スタッフにも言うんですよ。私、一人でやってると思ってないからねって。みんなと一緒にやってるからねって言って。責任を押し付けてます(笑)」。

皆で共有する“良かケア”のかたちは、これからますます重要になっていきそうだ。

EYES

それが大切

一緒に見る

人を
見る

訪問看護

松永 美紀 (51歳)

麻生介護サービス株式会社
アップルハート訪問看護ステーション大牟田所属
看護師
柳川市出身。高校卒業後、専門学校で正看護師の資格を取得。
東京、沖縄、久留米、柳川と様々な地域で看護師として働く。2008年から現在の職場へ。

LIKE
THE SUN

それが私の一番
人と向き合う
尊厳を大事に

訪問介護

伊藤 耐子 (55歳)

社会福祉法人原交会福祉会
サン久福木 ヘルパーステーションはなみずき所属
介護福祉士
みやま市出身。歯科、花屋、飲食店などを経て、デイサービスから介護業界へ。
現在の法人へ移った後、2020年から訪問介護部門へ異動。

伊藤さんは、利用者のご自宅を訪問して様々な介助を行う介護士だ。「家って自分のお城みたいなもの。デリケートなそんな場所によそ者が入っていくという形になるので、慎重に関わりを築いていきます。少しずつお互いにコミュニケーションを重ねていって、打ち解けることができたときの達成感はすごく大きくて嬉しくなります」。「頑張ってる家に入れるようになったよとか、お風呂にも入ってくれるようになったよ、とかですわね」。

伊藤さんは11歳のときに母を亡くした。父と二人きりの暮らしで寂しい日々だった。「何があっても寂しかったんです。心に穴が開いたような感じで。犬や猫をしょっちゅう拾ってきて世話をしていたような記憶が

あります」。これまで勤めてきた仕事はすべて人が相手。「独身の頃からですが、機械相手じゃなくて人。ずっと人が相手の仕事をしてきました。なんていうか、人を相手に仕事をするっていうのが多分好きなんです。花屋さんとか、飲食店とか。多分、母を早く亡くしているので、ずっと今でも心の底で人恋しいんでしょうね、自分ではそう分析しています。人と関われる仕事をしたいのかもしれないね」。

そんな伊藤さんも、初めて利用者のご自宅へ入ることになったときは戸惑った。「最初はやっぱり見ず知らずの方の家に入っていくのが難しいなと感じたんです。でも今はすごく勉強させてもらっていると思います。人生って言うと大袈裟ですけど、なんだ

かそんなものかもしれないと思って。やったことがないことなんて誰にでもありますよね、生まれてから。そして、その都度やっぱり不安になってしまう。初めてのことからなんでしょうけど、そこからちょっと踏み込んでみて、何かを見出だすというか、そういうことの繰り返しなんじゃないかなと思いますね」。

最後に伊藤さんに仕事の上で大切にしておられることを伺った。「いつも感じているのは、自分がされて嫌だと思わないってこと。私の中ではそれが鉄則かもしれません。例えば、服を脱がせるときに強く引っ張られたら嫌じゃないかな、とか。ご本人が痛くないように、そっと脱がすとかですわね。こう言われたら嫌なんじゃないか

とか、会話の中でこちらの話ばかりしたらつまらないだろうとか。なんかそういうのを仕事の上では意識しています。それを基本にしているというか、どれだけみなさんが不安に感じるようなことをさせていたでいるのか。気遣っているんですか、それはできるだけ大切にしています」。

あらゆる花が好きという伊藤さん。「しいて挙げれば元気な“ひまわり”ですかね。元気で強くたくましいみたいな」。伊藤さんとひまわり、お似合いです！

生きる道

これが私の

IDEAL JOB

小規模多機能型施設

松尾 由美子 (45歳)

株式会社銀水会
小規模多機能型居宅介護支援わがぜ所屬
ケアマネジャー
大牟田出身。十代で介護職を経験後、様々な職業を経験し現在の職場へ。

「介護という仕事に初めて出会った時、まさに天職だと思ったんです」。そう語り始めた松尾さん。小規模多機能型の事業所で計画作成担当者として勤務する松尾さんの人生は少しだけ波乱万丈なようだ。

「両親が飲食のお店を営んでたんです。それで子どもの頃は祖母と過ごすことが自然と多くて。色んなことを教えてくれました」。おばあちゃんがとても優しくたと振り返る松尾さん。十代で特別養護老人ホームに就職した。「世の中にこんなに楽しい仕事があるなんて知りませんでした」。その時のことを懐かしそうに振り返る。「人が好き、人と接することが好き。大好きな祖母の影響もあったんでしょうね」と松尾さん。早くに結婚し子どもができた。

様々な事情から一人で子育てをすることになり、複数の仕事を掛け持ちしながら働いた。

「睡眠時間も削って、昼夜間わず働きました」。職場に迷惑をかけたくない。大好きだった介護の仕事も辞めた。多忙を極める毎日だったが「いつかまた介護の仕事に戻りたい」その気持ちは決して忘れなかった。「おばあちゃんの影響もあったんですけど、利用者さんと話すのが本当に好きだったんです」。三十代を前に仕事の掛け持ちをやめ、父とともに自営業を始めた。「人に言ったら笑われちゃうと思いますが(笑)」と切り出す松尾さん。お父さんを「世界で一番、最高のパパ」だと話す。そのお父さんの体調がきっかけとなり再

び介護の世界へ復帰した。戻ってきた現場、「日々奮闘の日々ですが、やっぱり仕事は楽しくて仕方ありません(笑)」。現在の職場に勤めるようになりケアマネジャーの資格も取得した。

休日の過ごし方について尋ねた。「やっぱり美味しいものを食べて。美味しいお酒もですね(笑)」。「あとは孫と過ごすこと!可愛くて仕方ないです」。業務上のご苦労も尋ねてみる。「それはもちろんゼロではないですけど休みもきちんとただけてますし。夜勤だって掛け持ち時代と比べたら全然苦になりません。なにより仕事が好きですから」。

「今はもっともっと成長したい」そう話す松尾さんの鮮やかな眼差し。最高の環

境、最高の仲間と働いていると胸を張るその姿を見ていると、ふと介護の世界が目指すゴールにいるような気になってくる。仕事に対しての向き合い方は「今も父が手本」だと言い切る。「でも、いつか越えたいですね」。松尾さんが天職だと感じている介護の現場。そんな世界が今求められている。

「最終的に今こういった形になってますが、ある意味もう行き当たりばったりみたいな感じですよ。たまたま縁があって今に至ってるだけであって」。こう話すのは、居宅介護支援事業所で介護支援専門員(ケアマネジャー)を務める藺田さんだ。大牟田市出身の66歳。この日は自分の遺影用の写真もと、ダークスーツで現れた。

藺田さんは、高校を卒業して北九州の予備校へ。東京の大学へ進みたかったが、最終的に北九州の大学へ進学した。そのとき熱中したのがバンド活動と少林寺拳法だった。大学のフォークソング愛好会に入ったのがきっかけで始めたギター。「今更コピーなんてしてはじまらん、オリジナルじゃって」。友人と詩や曲を作り、様々なコンテストへも出場した。

また、偶然週刊誌で見かけた格闘技の記事がきっかけとなり始めた少林寺拳法。当時の大学周辺の治安が悪く、差別や犯罪がすぐ隣にある日々だった。その力を目当てに友人が誘ってくることもあったが、「そんなことをするためにやってるわけじゃない」と断った。大学卒業まで続け、その後就職した先の長崎の県大会で優勝、全国大会へも二度出場した。

大学を卒業した後、栄養補助食品を扱う企業に就職。営業を任せられ、31歳で結婚した。しばらくそんな暮らしが続いたが、その後仕事を辞め大牟田に帰郷、43歳で離婚した。そのとき見た新聞に載っていたのが介護保険制度が始まるというニュースだった。勤めていた職場を辞め、介護の世界へ足を踏み入れた。2001年、44歳の秋だった。

最初に勤めたのは土地勘のある島原の特別養護老人ホーム。厳しい現場だった。「先輩が自分がやりたくない大変な介助とかあると、俺みたいな新人に“代わりにやっといて!”って丸投げしたり。えーいちくしょう!って思うけど、手を出してもなんもならんけん。そんなとき少林寺がなんか自分への抑止にも役立ってたのかな」。

島原で施設内の職種を転々としながら社会福祉主事の資格を取得、2007年の実務研修を経て介護支援専門員(ケアマネジャー)となった。現場での立場をもっと良くするためというのもあったが、自分の担当だけに気を配り、他の利用者に気を配らない同僚の態度に疑問を感じていたのも理由だった。「自分の担当でなか人は知らんやろ。でも逆なのよ。そうじゃない人も大事にしていく。そこら辺はやっぱなんていうか、人間性っていうか」。「でもケアマネになったらなっただけは兼務なのよ(笑)。相談員とか送迎も兼務とか。介護の職員からしたら、お風呂も入れて欲しいとか食事介助もしてとか。その辺があやふややけんが」。

その後、2011年に社会福祉士の資格を取得。藺田さんにとって、介護支援専門員も社会福祉士も(本人はまぐれと笑うが)

一度で資格取得できたことは自慢の種だ。

「困ってる人をね、困らんごととしてやるとしたら、もう制度的なものでしか対応できませんけど、結局。本当にちょっとしたところでしか動けんばってんが、まあ結局は喜んでもらえるっちゃうか、その、良かった

と言ってもらえるのが一番でしょうけど。こっちも良かったなって思うでしょ。どうせ仕事するなら、なんだあいつはと思われるよりは、良くしてくれましたとか言ってくれるような仕事をした方が、自分もしたことないことをやることで経験にもなるしね」。

昨年末、藺田さんは地域のクラシックギター愛好会へ入会した。「両手指先使うからボケ予防にもなるかな。でも、もうそろそろ俺も看られる側になるかもしれん」。人生、紆余曲折の藺田さん、爪弾くギターはどんな音色を奏でるのだろうか。



人生いろいろ
価値もいろいろ

居宅介護支援 藺田 晋輔 (66歳)

医療法人信和会 居宅介護支援事業所はなぞの所属
介護支援専門員

大牟田市出身。少林寺拳法を修行。大学を卒業後、福岡の企業へ就職。2001年に特別養護老人ホームへ入職。大牟田に帰郷後、現在の職場へ。趣味はギター演奏。

酒本さんは、仕事を選んだきっかけになつたのは祖父だったと振り返る。「とても優しく、手先が器用でなんでもできる素敵な人でした」。福祉系の大学へ進学し、保健に関わる資格を取得した。その時はまだ介護の世界へ入るつもりはなかったという。

「ところが祖父が介護が必要な状態になってしまって、祖母が介護することになったんです」と酒本さん。酒本さん自身は祖父と同居しておらず、そのことを知るまでに時間がかかった。目の当たりにしたのは当時まだそれほど社会問題化していなかった老々介護の現実だった。「ただただ、悔しくて」自分が福祉の大学に通っており一定の知識を持っていたにも関わ

らず、祖父母に対して何もできなかった現実に自分を責めた。今度こそ自分が学んだ力を生かしたい。酒本さんは介護の世界へ進むことを心に決めた。

酒本さんに仕事へのやりがいを探してみた。「今の職場が自分にとっても合ってるんじゃないかなと思っています。日々変化していく利用者さんを傍で見守りながら手助けすることができ、触れ合うことができます。またそんな時間を大切にしている法人の考え方にとっても共感してるんです」。顔をほころばせながら語ってくれる酒本さんの瞳が輝く。

もちろん日々の仕事の上で難しいと感じることがあるだろうと尋ねてみると、「大変だと思ったりしたことはほとんどありま

糧に

今を生きる

後悔が

MAKE
PROGRESS

通所介護

酒本 恵利加
(38歳)

社会福祉法人それいゆ
地域密着型デイサービス「シールール」コパン所属
介護福祉士
大牟田市出身。福祉系の大学を卒業後、現在の職場に就職。

せん。それどころか毎日楽しいですよ!」と酒本さんはキッパリ。その表情に曇りは見えない。

アスリートは強く集中すると「ゾーン」と呼ばれる意識の状態になるそう。一旦その状態になると、水泳選手は自らがイルカになったような感覚になったり、ゴルフ選手はグリーンに設けられたカップが2メートルの大きさに見えたりするのだという。酒本さんが仕事の上で感じる感覚、それはこれに近いような集中した意識なのかもしれないと感じた。

休日はほとんどを子どもたちと過ごしているという。「外遊びが大好きで、一緒に公園とかで遊んでいます。私の癒しの時間

です(笑)」。それまで凛としていた表情が、そのときだけは母の表情に変わった。

彼女には大切にしている言葉がある。「広い視野を持つこと」。これは職場の上司が教えてくれた。「私は一点に集中しがちなタイプなんです。でもそれだと全体の小さな変化に気付いていくことができないんです。そんなとき、このことを思い出して広く全体を見てみるようにしています」。

「もっともっと成長したい。もっともっと私は頑張ります」。そう語る酒本さんの顔はまた凛と輝く。介護職一筋、15年が過ぎた。福祉のステージで酒本さんの挑戦はまだまだ続く。

ごあいさつ Greeting

『ヨカケアおおむた』第2作目を手に取っていただき、ありがとうございます。また、登場していただいた方、制作に携わってくださった方々に感謝申し上げます。前回に続き、今回はさらに幅広い年代の方々の貴重な「語り」を発信することができました。若者からベテランまで、それぞれが介護に対する熱い思いを持っています。皆さんはそれぞれのストーリーから何を感じ取られましたか？介護職に就ききっかけや、仕事に対する想い、そして人間らしいそのままの

姿は読む者の心に深く響くものがあります。表紙には新たな試みとして現役高校生を起用しました。これは、若い世代にも介護の重要性を理解してもらいながら、楽しさや美しさを想像してもらい、介護の未来に明るい希望を持ってもらうためです。この冊子が、介護の現場のリアルな声を届け、それぞれの本音を共有するきっかけとなることを願っています。読者の皆様にとって、新たな気づきや感動を提供できれば幸いです。

大牟田市介護サービス事業者協議会 会長 井田 謙

介護福祉サービスってどんなモノ？

※一例です



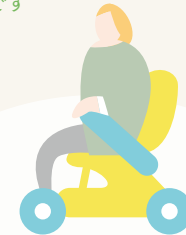
通所介護 (デイサービス)

日帰りのサービスで、通所介護施設で食事や入浴などの日常生活上の支援や機能訓練などを行います。



訪問介護 (ホームヘルプ)

ホームヘルパーが自宅を訪問し、身体介護や生活援助をします。



福祉用具貸与

日常生活上の便宜を図るための用具及び機能訓練のための用具を貸し出しするサービスです。



通所リハビリテーション (デイケア)

介護老人保健施設や指定事業所で介護や生活行為向上のためのリハビリテーションを日帰りで行います。



訪問看護

看護師や保健師などが訪問し、診療や状況の確認や指導などの補助を行います。



居宅介護支援

心身の状況を勘案し適切な居宅サービスなどを利用できるように、サービスの種類などの居宅サービス計画(ケアプラン)を作成するサービスです。

身体介護 食事、排せつ、入浴の世話 部屋の掃除や洗濯、食事の準備や調理 起床、就寝、服薬、通院の世話など 生活援助 生活必需品の買い物、薬の受け取りなど

表紙の写真

塚本 海空さん (16歳)

大牟田市内の高校に通う塚本さんは今年2年生。将来の進路には介護業界も視野に入っているそう。小学生の頃に母親に連れて行ってもらった介護施設のレクリエーションがきっかけに、「今はメイクの世界にも興味がある」という彼女と、晴天の諏訪公園で笑顔溢れる撮影会でした。



編集後記

みなさん、介護と聞いてどんなイメージを持たれていますか？介護業界の人手不足が深刻になっている昨今。より多くの人に介護の仕事の魅力を伝えていきたいとの思いから始まったプロジェクト。昨年、初版を発刊しましたヨカケアは、様々な反響をいただき、この度、第2弾を発刊することができました。このヨカケアは、介護に携わる様々な業態から、その現場で働く12人にフォーカスして、それぞれの思いや信念、またプライベートな部分まで取材をさせていただくことで、それぞれの人生観や人間味を感じることが出来ます。日々奮闘するなかで、利用者の方の笑顔や、喜ばれている姿を見ることにとてもやりがいを感じておられ、それを語られる姿はとてもしゃべり輝いていました。取材する私たちも、たくさんの発見や気づきがあり、とても勉強になりました。今後もイベントやインターネットなどを活用し、さらなる魅力の発信に努めていきたいと思っております。最後になりますが、お忙しい中、ご協力いただきました会員法人様、取材を受けていただいた方々、表紙モデルの方、そして本誌制作に尽力いただきましたデザイナー、ライターを含む実行委員会の方々に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。1人でも多くの方に手に取っていただき、介護やそれに携わる人々の魅力が伝われば幸いです。

実行委員長 齋田 豪堅

【ケアニッポン発掘プロジェクト】 齋田 豪堅/松井 直澄/待鳥 留奈/後藤 かずさ/平尾 武久/森内 優 (組織広報部会 部会長 菅原 知之)

大牟田市介護サービス事業者協議会

| 加盟法人 |

株式会社あすか介護サービス/社会福祉法人甘木山学園/医療法人幸知会/有限会社有明ケアサポート/一般社団法人大牟田医師会/公益財団法人大牟田医療協会/社会福祉法人大牟田市社会福祉協議会/医療法人福岡輝生会/医療法人けんこう兼行病院/医療法人完光会今野病院/社会福祉法人キリスト者奉仕会/株式会社銀水会/医療法人恵愛会/社会福祉法人けんこう/社会福祉法人原交会福祉会/社会医療法人弘恵会/社会福祉法人恩賜財団済生会支部福岡県済生会/重慶内科・外科/医療法人寿心会木村内科医院/医療法人橋仁心会たちばなクリニック/有限会社心介/社会医療法人親仁会/医療法人信和会/医療法人静光園/医療法人くさかべ病院/社会福祉法人それいゆ/社会福祉法人天光会/医療法人東翔会/社会福祉法人東翔会/医療法人富松記念会/株式会社西日本医療センター/株式会社ニチイ学館/社会福祉法人博愛福祉会/社会福祉法人福因寺福祉会/医療法人福寿会/医療法人睦月会堀整形外科麻酔科クリニック/社会福祉法人木犀会/有限会社モルゲン・ハチジュウハチ/やまなみ介護生活株式会社/医療法人悠久会/株式会社ゆうわ/有限会社ゆとり/社会福祉法人グッドタイムズ/有限会社サンステップ/株式会社あうる/医療法人静光園第二病院/有限会社ふれあい/株式会社福祉サービスカタ/有限会社宅老所ことの葉/麻生介護サービス株式会社/社会保険大牟田天領病院/社会福祉法人大牟田市福祉事業協会/医療法人吉田クリニック/医療法人兼行医院/有限会社北村/医療法人CLSすがはら/医療法人藤杏会/株式会社シャイニングライフ/社会福祉法人あらぐさ会/株式会社リード/株式会社おもてなし/株式会社Saita/一般社団法人IKEDAYA/伊藤商事有限会社/合同会社Leaf stone/社会福祉法人大川仁会/株式会社アクティブ